

2012年 和本で見る書物史
第9回 書物の広がり

はしぐち こうのすけ
 橋口 侯之介

和本入門 pp63-69

※「神保町ツアー」を第8回とする

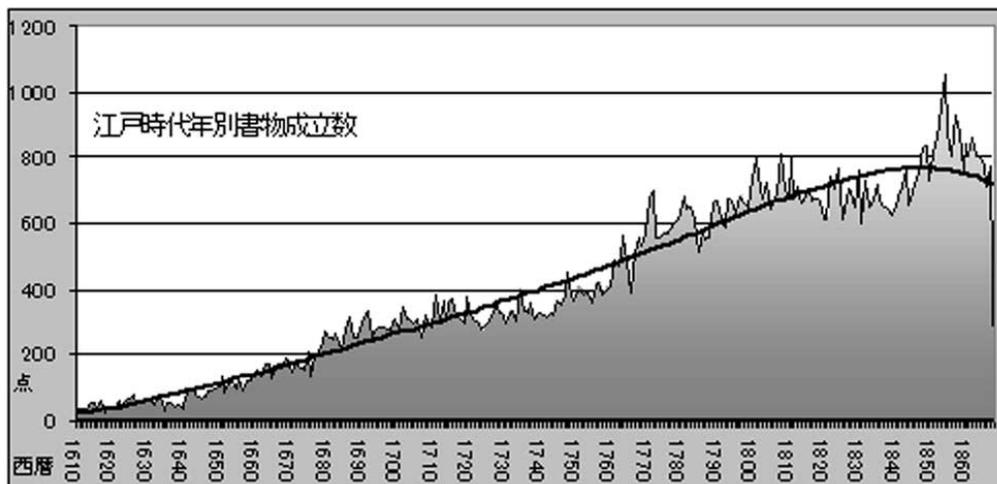
江戸時代の書物量

下の折線グラフは、江戸開府から明治維新までの260年間の間に成立した書物の点数をかぞえたものである（橋口侯之介『江戸の本屋と本づくり—続和本入門』から）。

始めのうち百点にも満たなかったものが、幕末には1000点を超えるようになった。増加率に変化はあるが、概ね右肩上がりに増加した様子が見える。

統計の基礎は、国立国文学研究資料館が運営するインターネット版和本目録である「日本古典籍総合目録データベース」から、本の成立年代ごとに集計したものである。

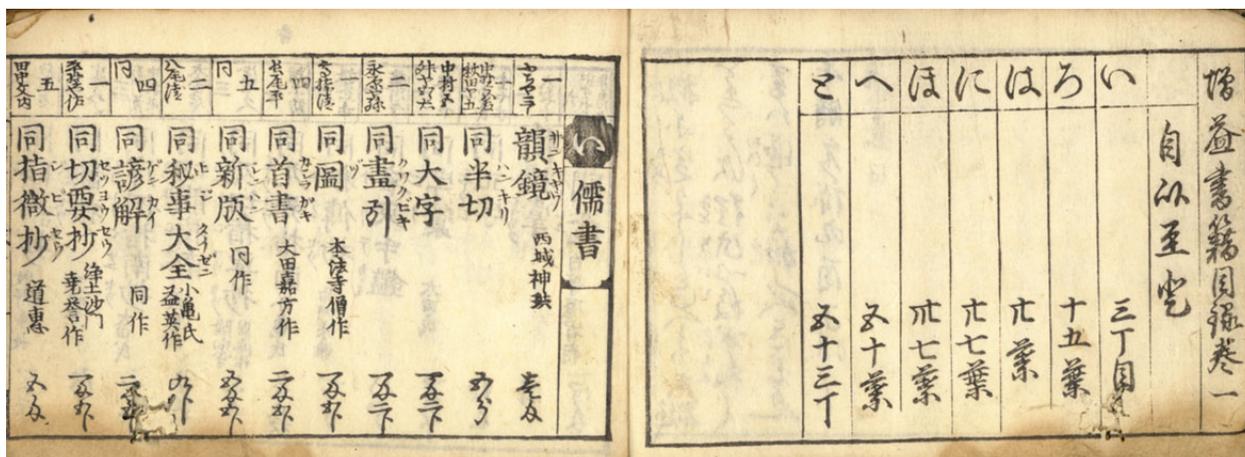
このデータベースには、有史以来明治初年までのおよそ45



万点の和本が収録されているが、そのうちの約1割が中世以前の書物。正しい成立年代が明確でない本が多いので、はっきりした本だけを選んだ結果約10万件のデータがとれた。それを表計算ソフトに入れてグラフ化したものだ。これを4倍すると実数に近づくと思われる。

江戸時代の前期（おおむね17世紀中）に商業出版が軌道に乗る。それを町版ともいい、京都の本屋が中心だった。江戸や大坂での出版は遅れ、軌道に乗るのは大坂が17世紀末の西鶴の時代、江戸は18世紀中頃に入ってからだった。

全体で刊行された書物の”総合図書目録”というべきものが1660年代あたりから京都で出版され始める。これを『書籍目録』（しよじやくもくろく）といい、5000点以上掲載されている。毎年改正されて刊行された。18世紀以降、江戸でも刊行された。

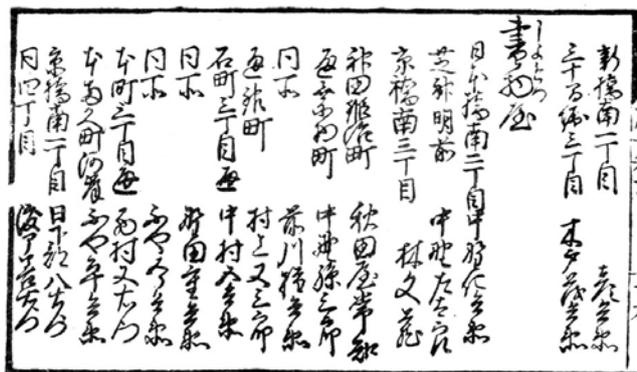


物之本と草紙

江戸期の1700年頃（元禄頃）の町の案内書『江戸鹿子』には「書物屋」と別に「浄瑠璃本屋」という項目があり5軒列記されている。

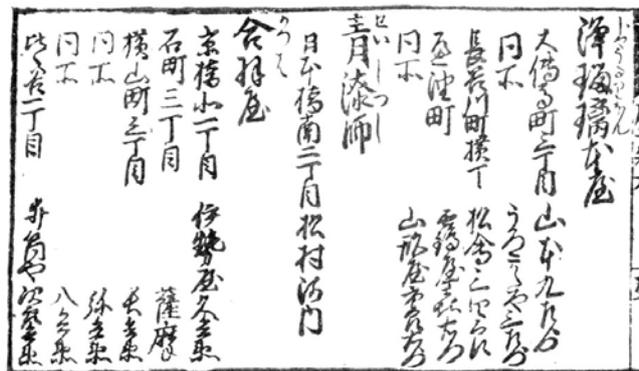
本屋、書物屋、書林などと呼ばれたのが物之本屋で、草紙屋は、はじめ浄瑠璃本屋と呼ばれていた。

本屋と草紙屋は江戸末期まで格の違いとして分けていた。



写本や私家版も多かった江戸時代

現代の出版物統計と異なるのは、江戸時代の書物は印刷本だけでなく数多くの手書きの本（写本）も多かった。手書きもメディアだったのである。これは中世からの伝統である。また、印刷本（版本）も、本屋の出す商業出版物（町版）だけでなく、個人が出す今の自費出版のような本（私家版）も多かった。その割合は右図のようであった。



『江戸鹿子』には、ほかに書本屋、唐本屋、屏風屋というジャンル分けがあった。書本屋が写本を専門に扱う店。唐本は中国からの輸入書の専門店。屏風をつくる店もあり、店名を見ると本屋と重なるので、本屋によっては屏風のような大物も売っていたのだ。

大坂の出版

江戸時代の大坂は〈をざか〉と呼ばれて阪の字はあまり使わなかった。一向宗の本拠地として信長に対抗していたが、滅ぼされてから秀吉によって町として再開された。大坂城を中心に商人の町として栄えた。江戸時代に入っても、家康は城として大坂を重視せず、商業都市の側面を支えた。

米、材木、紙、繊維など主要産品の集積地となり、金融の中心地でもあった。

しかし、文化的に発達するのは遅れて、1670年代まで大坂で出版が行われた形跡がなかった。

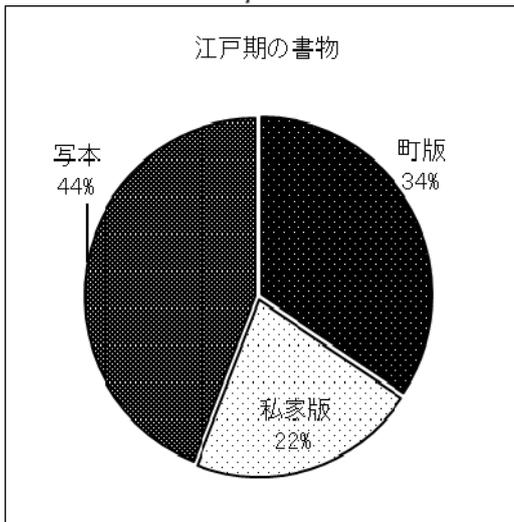
それが、西鶴の登場で様相が変わる。西鶴は俳諧師として注目されていた。初期の出版物は、俳諧作品集で、矢数俳諧といって、一晚で数千、一万単位の俳句を連発する興行を行ったりした。そのひとつ『生玉万句』は寛文13年（1673）出版で、これが大坂での最初の印刷本（版本）とされている。

それからようやく他の本も出されるようになり、西鶴の一連の浮世草子で一気に人気都市になった。

近松門左衛門の浄瑠璃、芭蕉などの俳諧書、日常の実用的な知識をまとめた「重宝記」というジャンルが得意であった。町人の文化である。

江戸はもっと遅れた

幕府の中心地だった江戸は、もともとは草深い田園地帯だったところ。そこに急速な都市化を行ったが、武士が中心でそれに伴う商人や職人が後を追う形で移住してきた。



そのため、権力基盤はあっても文化的には後進地である。最初の百年間、見るべき出版物はほとんどなかった。本屋も京都の店の支店（江戸店）が多く、大半は京都でつくられた本の焼き直しだった。そのため、

上方からすれば「海賊版」の恐れがあった。江戸らしい軌道に乗るのは18世紀中ごろからである。

それでも、少しずつ江戸の独自性が生まれてはきた。

菱川師宣を中心とする挿絵画家の台頭である。それまでも京都では挿絵入りの本が多くつくられてきたが、職人としてかかわるだけで、個人としての画家業とまではいえなかった。それが師宣によって挿絵に署名が入るほど、力量と人気が出た。



寺子屋（手習いの師匠）

江戸期の読者層拡大に、教育は欠かせない。文字を読む能力（リテラシー）を高めたのは、幕府による教育制度ではなく、民間の活力だった。各藩でも高等教育は担ったが初等教育はしない。

とくに最低限の「読み・書き」さらには計算能力である「そろばん」は庶民であっても子供の頃から行われた。今と同じで七歳になると親が師匠のところへあいさつに行き、「入学」させた。手習い所を担ったのは「寺子屋」とも呼ばれた「手習いの師匠」である。

主として師匠を担ったのは、始め寺院関係者だったが、しだいに武士（浪人）や医者、神主などであった。とくに浪人の生きる道としてふさわしかった。



これが全国各地にできた。19世紀初頭には全国で一万数千箇所、江戸だけでも二千以上あったという（文部省『日本教育史資料』明治

二十三年刊、富山房）。

女子の教育も盛んで、そのため江戸時代の識字率は40～60%といわれる。これは同時代のヨーロッパより高く、中国よりずっと高い。その数字には諸説あるが50%パーセントとしても、三千万の人口なら潜在的に千五百万人の読者人口が想定されることになる。これは巨大なマーケットが存在していたことになる。

本屋たちは、この市場に向けて出版を続けたのである。

